

第一章 第四山の手論

- 東京の地形、山の手と下町**

 - 東京は世界的にみても坂が多い街であり、山の手と下町がセットで存在している特別な街
- 第一山の手**

 - 最初の山の手の手住宅地は本郷。（夏目漱石や森鷗外も住んでいた）
 - 阿部家がこの地域での銭湯や店舗の営業を許さず、学者や政治関係者を住ませていた。
- 第二山の手**

 - 現在の山手線の内側の西半分は完全に郊外で、明治後期から大正時代にかけて開発されていった。
 - 路面電車も開通したので、青山、麻布、市ヶ谷などの山手線内側西半分にも人が住むようになった。
- 第三山の手**

 - 山手線の外側はまだ農地であった。
 - 様々な路線が開通した事により郊外住宅化を促進、また空気のきれいな郊外に住みたいという要求から田園都市の分譲が始まる
 - 関東大震災の影響により、東京の東側に住んでいた人たちはこれまで郊外であった品川、世田谷、吉祥寺に引っ越し人が増え、それにより市域が拡大していった。
- 第四山の手**

 - 高度経済成長期に入ると地方から東京に住み始める人も増えたことで、23区の人口は飽和していった。→三多摩地区や神奈川県、千葉県に開発された郊外住宅地に吸収されていった
 - そうして発展した地域の中には、たまプラーザのようにその後かなり高級住宅地になるものも存在している。→この住宅地は新たな山の手でないか？という仮説から、主として東急田園都市線沿線を中心とした郊外住宅地を「第四山の手ゾーン」と名付けた。
 - 社会・経済・交通などの発達の影響を受けながら、新しい山の手が拡大していった

第二章 東京は増加する人口を吸収してきた

- 昭和の「大東京」時代**

 - 昭和になると、東京 15 区に周辺の町村が加わり 35 区になる。→大東京
 - 区をまとめていく際に大森区+蒲田区で大田区のように合体させていった。
- 第三山の手時代に住宅地はどこで建設されたのか？**

 - 第三山の手→田園調布、成城学園、常盤台
 - 環境が良く住宅地が多く建ち並ぶことになった、成城や国立に多くの教育施設が建ち並んだ
- 流入してきたほとんどが若者だった**

 - 戦後東京に流入してきたのは 15 歳か 30 歳の若い人であった。
 - 彼らは労働先のある工業地帯に住んでいた。
 - 彼らの多くは未婚者であるため、家族ができた際に引っ越すことができるように団地や一戸建てが必要であった。
- 流入してきたほとんどが若者だった**

 - 戦後東京に流入してきたのは 15 歳か 30 歳の若い人であった。
 - 彼らは労働先のある工業地帯に住んでいた。
 - 彼らの多くは未婚者であるため、家族ができた際に引っ越すことができるように団地や一戸建てが必要であった。

第三章 山の手の手条件

- 山の手と下町の格差**

第一：地形的に高台であること

第二：住民の中心が上流階級の人であること

 - かつて山の手には武士がが住み、その後も有名企業の部長や課長クラスの人が多く住む地域である
 - かつて中央線の荻窪は将官（大将）、阿佐ヶ谷は佐官（大佐）、高円寺は尉官（大尉）が住む町であった。
 - 現代でもそのような役職による住む場所の格差は存在している

- 山の手と下町の格差**

第一：地形的に高台であること

第二：住民の中心が上流階級の人であること

 - かつて山の手には武士がが住み、その後も有名企業の部長や課長クラスの人が多く住む地域である
 - かつて中央線の荻窪は将官（大将）、阿佐ヶ谷は佐官（大佐）、高円寺は尉官（大尉）が住む町であった。
 - 現代でもそのような役職による住む場所の格差は存在している
- 山の手と下町の関係も変化した**

 - 山の手と下町は隣接しており、歩いて 10 分ぐらいの距離しかなかった。
 - 第四山の手になると状況が一変し、山の手の中に下町が出てきて、下町と山の手の間が離れていると感じるようになった
- 東側の発展**

第一下町：お江戸日本橋

第二下町：浅草

第三下町：工場が増えていった隅田川付近

第四下町：葛飾区、江戸川区、足立区

第四章 郊外の文化論

- アメリカの豊かさが日本人の憧れだった**

 - 日本に電化製品があまり普及していなかったころ、アメリカの郊外での暮らしを見て、それらの憧れを抱いていた→アメリカの大衆文化が 50 年代に日本で流行り始めた
 - ニューヨーク万博でフューチャーマという未来の都市→郊外に人が住んでクルマで移動するようになり、自動車会社と石油会社が儲かる
 - NY 万博は古いヨーロッパの封建主義、共産主義と社会主義、全体主義のアンチテーゼであり、個人がだれでも自由に豊かになる事を実現したのがアメリカの郊外であった。
 - それらの影響を東京の郊外も受けている

第五章 郊外の歴史と問題

- レッチワース**

 - 東京の郊外の原型はイギリスで 1903 年に産生をあげたレッチワークという田園都市
 - 近代の英国では異なる階級が完全に分離して住むことが主流であったが、レッチワークでは階級関係なく一緒に暮らしている
- 郊外の問題**

 - 男性が都心で働いて、女性は家で家事をするというジェンダー分離
 - 画一的な郊外に住む若者が抑圧感を感じるようになり、若者の反抗がおこる
 - 人種問題、黒人の排除
 - 環境問題

第六章 郊外の未来

- 暗いシナリオばかりだが・・・**

 - 高齢化が進むことは確実
 - 廃墟化した空き家が放火される事件や誰かが知らない間に住み着く→空き家を改修して新たな郊外を作り上げることで価値を見出せる
- 子育てしやすい場所に人が集まる**

 - 子育てをするために親の近くに住みたいと答える女性割合が高い→郊外への転入人口が減れば土地が安くなるので、郊外に住み続け大家族を気づき上げることができる